

論文

少年支援ボランティアの長期継続を通じた援助成果の認識 –BBS (Big Brothers and Sisters) 会「ともだち活動」体験者の継時的変化に焦点をあてて–

小田原短期大学教授 間野 百子

(要旨)

本稿では、BBS (Big Brothers and Sisters) 運動を最も特徴づける活動である、「ともだち活動」の体験者を対象として実施した質問紙調査を通して、長期継続者(5年以上)の援助成果の継時的変化を明らかにすることを目的とした。分析では、活動経験を、「初期」(BBS会入会から1, 2年以内)、「中期」(入会から概ね3年以上経過または「ともだち活動」担当後)、「現在」(役員の方は、役員就任後)の3期に分けた。そのうえで、3期毎の援助成果に関する15の質問項目の選択数を算出し、各期に対する回答にCochranのQ検定を適用した。その結果、差のある傾向($P < 0.1$)が認められた項目については、「初期」と「中期」、「初期」と「現在」、「中期」と「現在」の選択率の差に、McNemar検定を適用した。その結果、最も成果認識が高まるのは、「中期」であること、非行問題への関心を示す項目においては、経験年数を重ねるにつれて選択率が上昇していくことなどが示唆された。

キーワード：少年支援ボランティア、BBS (Big Brothers and Sisters) 運動、「ともだち活動」、援助成果

I 課題と目的

1. ともだち活動の特徴

課題を抱える少年の援助には様々な方法がある。少年の抱える課題が多様化・複雑化する現代社会においては、それぞれのニーズを踏まえて個別に支援していくことの必要性が高まっており(生島, 2003; 佐々木, 2013)、少年支援ボランティアの果たす役

割は大きい。日本では、BBS (Big Brothers and Sisters, 以下BBSと略記) という民間団体が、1947年以降、課題を抱える少年の更生を支援する活動を展開してきた¹。その中核の活動である、「ともだち活動」では、非行少年²や社会不適応少年の自立や立ち直りを会員が個別・継続的に支援している。「ともだち活動」とは、「非行少年や、社会に適応

できないなど何らかの悩みを抱えた少年と『ともだち』になることを通して、彼らの自立を支援する持続的な活動」(法務省保護局, 2009, p.6)を意味する。

更生保護における民間ボランティアの役割については、更生保護学、非行臨床学、福祉教育などの領域で、学際的に論議されている(藤本・生島・辰野, 2016; 長谷川, 2016; 宇戸, 2013; 久保・八木原, 2011)。さらに、保護観察官が「ともだち活動」に期待しているのは、少年の話し相手になることや学習支援である(小林, 2012)ことや、BBS運動では、学生会員ならでの利点があること(竹中, 2016)なども明らかにされている。しかしながら、一般市民の更生保護に対する理解は必ずしも高くはない。

日本のBBS運動の特徴として、更生保護制度における官民協働態勢のもとで、保護司、更生保護女性会員とともに、民間ボランティアの一翼としての役割を担っていることが挙げられる。「ともだち活動」は、「受動性・制約性」³を伴ううえ、「保護観察という強固な枠組みの中で、権力的側面をもたない対等な関係を構築していくという非常に役割の難しい活動」(大原, 2009, p.321)であると指摘されている。「ともだち活動」は、20世紀初頭に米国で組織化された、BBBS (Big Brothers Big Sisters) 運動をモデルとしており、「メンタリング (mentoring)」という個別・継続支援を取り入れている。メンタリングとは、「少年の人格形成や能力向上

の手助けをする経験豊かな年上の人」を意味する「メンター (mentor)」(Wright, 1999, p.72) からくる概念である。良好なメンタリング関係を構築するうえで鍵となる概念は、援助者・被援助者間に生じうる「互惠性 (reciprocity)」である (Taylor & Bressler, 2000)。

2. 「ともだち活動」の着眼点

本稿では、以下の点を明らかにしたいと考え、「ともだち活動」の援助者であるBBS会員に着目した。

第一は、社会人としても運動を継続し、仕事や家庭との両立を図りながら、若手会員の支援や組織運営などに尽力しているベテラン会員の成果認識の継時的変化についてである。学生会員 (2018年度では総会員数の43%を占めている)(特定非営利活動法人日本BBS連盟, 2019, p.231) の約半数は、卒業と同時に退会してしまうため、BBS会も長期継続を促すための支援対策を講じている(長谷川, 2016)。さらに、学生会員中心の学域BBS会においては、社会人会員との接触が少なく、先輩会員の体験談を活かしていくことの難しさが指摘されている(竹中, 2016)。したがって、若手会員が先輩の経験知から学びつつ、少年との相互関係を構築していくうえでも、ベテラン会員の存在は多大であると考えたからである。

第二は、BBSの活動を開始する前に、非行少年との接点を有さず、非行問題への関

1 米国を発祥の地とする、BBBS (Big Brothers Big Sisters) 運動は、戦後動乱期の日本にも紹介された。日本の運動の源は、1947年(昭和22年)に創設された、「京都少年保護学生連盟」にまで遡る。創設者の永田弘利は、少年犯罪の原因は、少年を取り巻く生活・友人環境にあるため、少年と世代の近い学生にも何かできるのではないかと考えていた。当時の司法関係者は、米国の運動を範とした少年の支援活動を推進しようとしていた。こうして、永田らは、京都少年審判所の支援を受けて、1947年に学生主体の活動が、日本BBS連盟という名称のもとで組織化された(永田, 1988)。

2 以下「非行少年」とは、犯罪少年、触法少年、虞犯少年、及び警察官職部執行法に基づき定められた少年警察活動規則2条6号に記載されている行為を行った少年(不良行為少年)の意味で用いる(日本BBS連盟, 2005)。

3 ここでの「受動性・制約性」とは、会員自らが少年を探し出し、アプローチするのではなく、「少年について何らかの責任を持つ者(組織・団体)からの依頼を受けて、その責任者(組織・団体)に対する協力の形で行う」(法務省保護局, 2009, p.9)活動であることを意味する。

心や理解が必ずしも高くはなかった会員の非行問題への意識が、少年との交流を通して、どのように変化していくのかについてである。なぜなら、非行行為は必ずしも誰もが直接的に体験しているわけではないし、BBS会員のなかで、非行体験を実際に有する会員はごく少数であると考えられるからである⁴。

3. 目的

以上を踏まえて、本稿では、「ともだち活動」経験者を対象として実施した質問紙調査のうち、「ともだち活動が援助者に及ぼしたメリット」への回答を分析の対象にすえた。そのなかで、BBSの活動を開始する前に、非行少年との接点を有さず、非行問題への理解や関心が必ずしも高くはなかった会員が、活動の成果をどのように捉えているのか、さらに、活動の継続を通して、成果認識がどのように変化していくのかについて明らかにすることを目的とした。これらを明らかにすることにより、非行少年の支援という特殊性をもつBBS運動の意味を明確にできると考える。

II 調査方法

援助者が活動を通してどのような体験をしているのかについて明らかにするために、会員の属性(年代、性別、活動歴など)、参加動機、継続要因、活動を通して学んだことなどに関する質問紙調査を実施した。

⁴ 長谷川正光氏によると、正式なデータは存在しないが、非行体験を有する現会員は、数名前後と推測されることである(2017年8月4日、日本BBS連盟本部において、BBSに関する最新情報を伺った際の御見解)。

1. 調査協力者の選定

協力者の選定にあたっては、日本BBS連盟の事務局長、長谷川正光氏(2017年5月以降は、日本更生保護協会事務局次長:NPO法人日本BBS連盟常務理事)との討議の結果、地方BBS連盟理事8名ならびに都道府県BBS連盟会長50名、計58名の所属先の事務所に質問紙を送付することが的確であるという結論に至った。その理由は、役職に就いている会員は各支部の状況を把握できる立場であるうえに、地域性に偏りのない調査を実施できるからである。さらに、各役員から協力者を募るよう、あわせて依頼することとし、役員分を含めて1カ所につき、4通の質問紙を同封した。役員以外の3名の選別法は、「『ともだち活動』の経験がある会員」という以外は特に指定していない。郵送した質問紙の総数は232通で、6通は「該当者なし」として返送されたため、最大で226通が会員に配布されたこととなる。返却数は77通で、回収率は34.1%であった。77通のうち有効回答数は71通、有効回答率は、92.2%であった。調査時期は、2014年12月19日(質問紙配布)から回収締め切り日(2015年3月末日)までである。

2. 活動が会員に及ぼした成果、「援助成果」の分析

(1) 倫理的配慮

調査協力者は、「ともだち活動」の経験を有する(した)BBS会員であり、少年の個人情報保護について日本BBS連盟から厳しい訓

練を受けている。したがって、協力者が会の規則を遵守したうえで回答可能な範囲内で調査を行うよう配慮し、少年の状況に関する回答は求めなかった。質問紙は無記名で回収し、個人を特定できる情報は入手していない。調査の実施にあたっては、2014年9月27日の日本BBS連盟の理事会において正式に承認された。

(2) 活動時期

BBSの活動が会員に及ぼした成果に関する問いでは、活動時期を3期に分けて、活動経験を通してプラスになったと思う項目について各期別に選択するよう依頼した。3期は、①活動初期(活動開始から1-2年くらいまで)②活動中期(活動開始から概ね3年以上経過、または「ともだち活動」担当後)③現在(役員の方は役員就任後)とした。

「初期」「中期」「現在」に分けた理由は、地区により、新会員に任される活動内容は異なりうるが、活動経験に伴う会員の成果認識の変化を明らかにするためである。「初期」は研修会に参加し、更生保護や少年との関わり方について学んだり、グループワークなどに参加する期間とした。その後、「ともだち活動」の担当を単独で任されたりしてからは「中期」とした。

(3) 質問項目の作成と分類

援助成果に関する質問項目は、長谷川氏ならびに研究者(精神科医・臨床心理学者)

との討議を踏まえて、以下の先行研究を参考にしながら15の項目を独自に作成した(表1の質問項目参照)。

第一に、妹尾(2001)のボランティア活動における「援助成果」の概念、ならびに妹尾・高木(2003)の「援助成果測定尺度」である。援助成果とは、「向社会的行動において、他者との相互作用を通じて、援助者自身が認知する心理・社会的な内的報酬」と定義される)。そして「援助成果測定尺度」は、「一過的ではない、長期にわたる援助行動であるボランティア活動から得られる援助成果を扱っており、継続的にボランティア活動などを動機づける要因を探ることを目的として作成されたものである…広い年代を対象として利用可能であろう」(堀, 2011, p.223)と評され、信頼性・妥当性の高い尺度である。妹尾らは、援助成果について、3因子、11項目を導き出している⁵。

次に、メンタリング研究における互惠性の視点(Taylor & Bressler, 2000)を追加した。さらに、BBSの特殊性として、非行少年と関わるという点、及び、活動体験が学生会員の職業選択に資すると考え、これらは妹尾論文には含まれていないので、追加した。

その結果、領域としては、妹尾論文の3領域に非行と職業選択の2領域を加え、5領域で質問項目を作成した。妹尾らの尺度

⁵ 妹尾らが導き出した「援助成果測定尺度」の下位尺度3因子と11の質問項目は、以下の通りである。「愛他的精神の高揚」(「人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた」「日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった」「自分ができることで社会と関わり、人の役に立つことができた」「対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた」);「人間関係の広がり」(「活動そのものが楽しめた」「仲の良い友達ができた」「新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった」「対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になっている」);「人生への意欲喚起」(「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた「気持ちの充足感が生まれた」「やりがいがあった」)。

表1 15項目の3期別選択人数・割合、各検定値(39名、複数回答)

領域	質問項目	3期別 選択人数と割合			P値 ^{※1}	初期と 中期	初期と 現在	中期と 現在
		初期	中期	現在				
愛他的精神 の高揚 1)	7. 自分の個性や能力を少年支援に活用できることが生きがいとなった	12名 30.8%	13名 33.3%	13名 33.3%	0.966			
	11. 自身も辛いときに周囲の人に助けられたので、その恩返しができた	5名 12.8%	9名 23.1%	5名 12.8%	0.264			
	13. 少年の自立や成長をみるのが生きがいとなった	6名 15.4%	13名 33.3%	10名 25.6%	0.099 †	0.039*	0.344	0.581
人間関係の 広がり 2)	8. 若年者との意思疎通や職場での人間関係を円滑に運べるようになった	4名 10.3%	13名 33.3%	13名 33.3%	0.011*	0.004*	0.012*	1.000
	12. 様々な世代や職業の人と交流でき、視野が広がった	21名 53.8%	17名 43.6%	22名 56.4%	0.472			
	15. 人間は互いに支え合ったり、学び合ったりすることができることを知った	15名 38.5%	17名 43.6%	14名 35.9%	0.738			
人生への意 欲喚起 3)	1. 他者の気持ちや悩みをじっくりと聴き、相手の心境を推し量りながら、対応する能力が向上した	11名 28.2%	22名 56.4%	12名 30.8%	0.031*	0.063 †	1.000	0.031*
	9. 活動を通じて、自分自身が勇気づけられたり、励まされたりした	13名 33.3%	17名 43.6%	13名 33.3%	0.449			
	10. 他者の役に立てることに気付き、自尊感情が芽生えた	9名 23.1%	8名 20.5%	8名 20.5%	0.949			
非行問題へ の関心 4)	2. 少年事件に関する一面的で過剰なマスコミ報道に疑問を感じるようになった	6名 15.4%	8名 20.5%	14名 35.9%	0.094 †	0.774	0.096 †	0.180
	5. 少年の立ち直りを支援することをとおして、社会に貢献できた	10名 25.6%	13名 33.3%	14名 35.9%	0.554			
	14. 少年の自立や立ち直りは、地域社会全体で支援すべきであることを実感できた	9名 23.1%	14名 35.9%	19名 48.7%	0.056 †	0.302	0.041*	0.332
将来への職 業の意識 5)	3. ボランティア体験が就職時に有利に働いた	3名 7.7%	7名 17.9%	2名 5.1%	0.174			
	4. 学業と職業を結び付けて考えられるようになった	3名 7.7%	2名 5.1%	3名 7.7%	0.882			
	6. 現場での問題意識が深まり、現在の職業に就くきっかけとなった	2名 5.1%	7名 17.9%	4名 10.3%	0.121			

n=39(※1 CochranのQ検定, ※2・※3・※4 McNemar検定, *: P<0.05, †: P<0.10)

1) 2) 3) 妹尾論文の領域: 4) 5) 今回の調査独自の領域

の11の質問項目は、「人生への意欲喚起」3項目、「愛他的精神の高揚」4項目、「人間関係の広がり」4項目であるが、今回は、各項目を選択したか否かの調査のため、領域によって質問数が異なることで、重要性の印象が影響を受けるのをさけるため、質問項目は5領域で3個ずつとした。なお、前述の通り、回答は選択したか否かの2値のため、因子分析は行わず、15項目のそれぞれの選択率の比較を行った。質問紙には、各領域からランダムに質問を表示したが、表1には、領域ごとに並べ直した結果を提示した。

(4)分析方法

援助成果に関する15の項目に該当するか否かについて、①「活動初期」②「活動中期」③「現在」の3期別選択者数と比率を示し、援助成果の継時的変化を検討した。次に、15項目の各期の選択率の差に、CochranのQ検定を適用した。その中で、有意傾向以上の差を示した項目については、初期と中期、初期と現在、ならびに中期と現在の選択率の差にMcNemar検定を適用した。統計的有意差検定の有意水準は0.05とし、0.1未満を有意傾向とした。

Ⅲ 調査結果

1. 協力会員の属性

質問紙調査全体の有効回答者の総数は71名(男性35名、女性36)名で、年代は、「20代前半」38名、「20代後半」4名、「30代前半」1名、「30代後半」6名、「40代」8名、「50代以上」14名、「活動期間」は、「5年未満」31名、「5年以上～10年未満」16名、「10年以上～15年未満」3名、「15年以上～20年未満」5名、「20年

以上～30年未満」7名、「30年以上」9名であった。

「自分へのメリット」に関する問いへの有効回答者66名の「初期」「中期」「現在」の選択状況をみると、「初期のみ」に回答をした人は14名(全員20代前半、うち13名は学生、1名は不明)；「初期と中期のみ」2名(20代前半)；「初期、中期、現在」の3期全てに回答をした人は50名であった。

本稿では、長期継続者の成果認識の継時的変化を検討することを目的としているため、活動経験年数が5年以上あり、「援助成果」に関する項目の「活動初期」「中期」「現在」の3期全てに回答した39名を対象を絞ることとした。

39名の属性は以下の通りである(「男性」24名、「女性」15名；「20代前半」7名、「20代後半」4名、「30代前半」1名、「30代後半」6名、「40代」8名、「50代以上」13名)。「活動期間」は、「5年以上～10年未満」16名、「10年以上～15年未満」3名、「15年以上～20年未満」5名、「20年以上～30年未満」7名、「30年以上」8名であった。「現在の職業」は、「会社員」14名、「教員」3名、「公務員」8名、「自営業」5名、「専業主婦」1名、「その他」(専門学校職員、保護司、保育士、福祉事業者など)7名、「大学院生」1名。

2. 15項目の3期別選択人数と割合

39名の選択傾向をみると、3期ともに、「12. 様々な世代や職業の人と交流でき、視野が広がった」の選択者が最も多く、対象少年のみならず、BBS会の同志、更生保護関係者など、様々な年代や職業の人びととの人脈

の広がりや各期の成果として認識していることがうかがえる。

初期、中期、現在と徐々に選択率が増える項目は、「2. 少年事件に関する一面的で過剰なマスコミ報道に疑問を感じるようになった」(「初期」6名15.4%、「中期」8名20.5%、「現在」14名35.9%)、「14. 少年の自立や立ち直りは、地域社会全体で支援すべきであることを実感できた」(「初期」9名23.1%、「中期」14名35.9%、「現在」19名48.7%)であった。さらに、初期から中期に選択率が増える項目は、「1. 他者の気持ちや悩みをじっくりと聴き、相手の心境を押し量りながら、対応する能力が向上した」(「初期」11名28.2%、「中期」22名56.4%、「現在」12名30.8%)と「13. 少年の自立や成長をみるのが生きがいとなった」(「初期」6名15.4%、「中期」13名33.3%、「現在」10名25.6%)であった。

中期に選択率が最も増える項目は、15項目中9項目【(11, 13, 15, 1, 9, 3, 6, 7, 8(7と8は、現在と同率)】あり、初期から中期に選択率が増える項目が12項目あった。

3. 解析結果

援助成果に関する15の質問項目の選択数と各期に対する回答に、CochranのQ検定を適用した(表1 P値※1)。検定の結果、先述の1と「8. 若年者との意思疎通や職場での人間関係を円滑に運べるようになった」には有意差が、13, 2, 14には有意傾向が認められた。

そこで上記の5項目について、初期と中期、初期と現在、ならびに中期と現在の選

択率の差にMcNemar検定を適用した。その結果、初期と中期に関しては(表1, P値※2), 13(P=0.039), ならびに8(P=0.004)には有意差が認められた。さらに、1には有意傾向が認められた(P=0.063)。以上より、これらの項目については、中期には初期とは違う意識が育つことが示唆された。初期と現在(表1, P値※3)では、8(P=0.012), 14(P=0.041)には有意差が、2(P=0.096)には有意傾向が認められた。さらに、中期と現在(表1, P値※4)では、1「他者の気持ち〜」のみ有意差が認められた(P=0.031)。この項目は、現在の選択率が中期より減少しているが、中期に認識して継続している成果を現在の成果としては改めて選択しなかったと考えられる。

IV 考察

ここまで、「ともだち活動」を長期にわたって継続してきたBBS会員の援助成果の継続的変化について検討してきた。結論として、長期継続に伴う会員の成果認識の変化やこの種のボランティアを継続していくことの意味について考察する。

第一に、「ともだち活動」の長期継続者の回答に基づき分析した結果、会員の非行問題への認識や地域社会全体で少年の立ち直りを支えることの意味を認識していくことが示唆された点である。15項目中9項目は、中期に選択率が最も増え、初期から中期にかけては、12項目において選択率が増えていた。中期に至ると、研さん活動を受けたり、地域活動やグループワークへの参加などをする期間を経て、「ともだち活動」を担当して

いる可能性が高いため、ケースを担当することが援助成果の認識を高めていると考えられる。さらに、「非行問題への関心」に関しては、3項目全てが、初期、中期、現在へと経験年数を重ねるにつれて、選択率が上昇していた。なかでも、2の「少年事件に関する一面的で過剰なマスコミ報道に疑問を感じるようになった」は、初期と現在では、有意傾向(P=0.096)が、14の「少年の自立や立ち直りは、地域社会全体で支援すべきであることを実感できた」は、有意差(P=0.041)が認められた。これらの項目は、BBS運動特有の学習成果であることから、長期の体験を通して、非行問題への意識や少年理解が徐々に深まっていったことを示唆していると考えられる。

第二に、会員自身が、生きがい、自尊感情、人間関係の構築などの互惠的成果を認識している点である。妹尾論文では、「愛他的精神の高揚」は、「対人態度のポジティブな方向への変化」や「自分は役に立てたということ」を示すが、13の「少年の自立や成長をみるのが生きがいとなった」は、初期と中期に有意差が認められた(P=0.039)。「人間関係の広がり」は、「ボランティア活動を契機とした人と人との好ましい触れ合い」と定義され、ボランティア活動全般に共通する領域である。8の「若年者との意思疎通や職場での人間関係を円滑に運べるようになった」は、初期・中期(P=0.004)、初期・現在(P=0.012)ともに有意差が認められた。これらは、対象少年のみならずBBSの若手会員や多様な職業や世代の関係者との交流

が、援助者の活動外での対人関係に資していることを示唆している。「人生への意欲喚起」は、「やりがいのある、充実感を味わえる目標ができたという自己のポジティブな内面変化」と定義されているが、1の「他者の気持ちや悩みをじっくりと聴き、相手の心境を押し量りながら、対応する能力が向上した」は、初期と中期に有意傾向が認められ(P=0.063)、若手会員が、少年との意思疎通の回り方について学びを深めていることがうかがえる。なお、「将来の職業への意識」は、職業観を形成したり、活動経験が就職に有利に働くなど、主に学生会員に及ぼす成果を示す領域としたが、3期ともに選択率は低かった。

第三に、少年支援ボランティアの長期継続者を増やし、援助者網を豊かにしていくことの意味である。2000年の少年法改正以降、少年の地域社会内における立ち直りに対する世間一般の厳しさが増している(佐々木, 2007)。そうしたなか、少年を取り巻く家庭・学校・社会環境の課題に目覚め、第三者が少年を支援することの意味について学びを深めた会員は、一般市民と少年を橋渡しする役割を担うことができると考えるからである。

最後に、ボランティア組織による人材確保・養成・支援体制が必要な点である。特に「ともだち活動」は、中期以降に成果認識が高まる傾向があることから、長期的視野に立ったの研さん活動の一層の充実化や学生から社会人への移行期の個別支援などの支援体制が重要であるといえる。

本研究の限界は、BBS運動に現在関わっ

ている会員しか対象にできなかった点にある。特にベテラン会員については、BBS運動の社会的役割についての意識が高い(または高めた)会員に偏っている可能性がある。

今後は、「ともだち活動」経験者を対象として実施したインタビュー調査の分析を通して、少年との交流を深めるなかで、会員がどのような課題を乗り越え、非行問題への意識を変容していったのかについてのプロセスを詳細に検討することが必要であると考える。

〔謝辞〕

調査にご協力頂きました、BBS関係者の皆様様に心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

藤本哲也・生島浩・辰野文理編著『よくわかる更生保護』ミネルヴァ書房(2016年)。

長谷川正光「BBSにおける学生ボランティア活動の沿革と現況」『青少年問題』第664号(第63巻秋季号)(2016年)10-15頁。

法務省保護局「ともだち活動をするみなさんへ」(2009年3月改訂版)。

堀洋道監修/吉田富二雄・宮本聡介編『心理測定尺度集V：個人から社会へ<自己・対人関係・価値観>』サイエンス社(2011年)。

小林淳雄「保護観察官に対するBBS運動に関する意識調査の結果について」『更生保護と犯罪予防』No.154(2012年)135-143頁。

久保美紀・八木原律子「更生保護における支援特性：保護司の活動に焦点をあてて」『研究所年報』第41号、明治学院大学社会学部付属研究所(2011年)107-115頁。

永田弘利「BBS運動の芽生え、犯罪と非行」『青少年更生福祉センター・矯正福祉会』第76号(1988年)81-87頁。

日本BBS連盟『BBS運動基本原則解説』(2005年)。

大原天青「非行臨床における訪問援助活動の役割と課題：BBSのともだち活動の実践」『カウンセリング研究』日本カウンセリング学会, 42(4)(2009年)312-321頁。

佐々木正昭編著『臨床教育学：課題を抱える子ども・親・教師への支援』学事出版(2013年)。

佐々木光明「非行少年の処遇と更生保護制度—『立ち直り』を支えるものは何か』刑事立法研究会編、『更生保護制度改革のゆくえ：犯罪をした人の社会復帰のために』現代人文社(2007年)234-265頁。

妹尾香織「援助行動における援助者の心理的效果：研究の社会的背景と理論的枠組み」『関西大学大学院人間科学』55(2001年)181-194頁。

妹尾香織・高木修「援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果」『社会心理学研究』18(2)(2003年)106-118頁。

生島浩『非行臨床の焦点』金剛出版(2003年)。

竹中祐二「BBS活動の意義」『青少年問題』第664号(第63巻秋季号)(2016年)16-21頁。

Taylor, A. S. & Bressler, J., *Mentoring Across Generations: Partnerships for Positive Youth Development*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers, 2000.

特定非営利活動法人日本BBS連盟『BBS運動発足70周年記念誌—過去から未来へ つづける・つなげる・次の手に』日本BBS連盟(2019年)。

宇戸午朗「保護司に対する意識調査」日本更生保護学会『更生保護学研究』第3号(2013年)55-84頁。

Wright, Paul S., "Understanding and Mentoring with At-Risk Youths", in Hawkins, Melissa O., McGuire, Francis A. & Backman, Kenneth F. (Eds.), *Preparing Participants for Intergenerational Interaction: Training for Success*. New York: The Haworth Press, 1999, pp.67-91.

英文タイトル

Consideration on what volunteers for supporting youth learn from long-term experiences: focused on the BBS (Big Brothers and Sisters) members' changing recognition of "tomodachi katsudo"

Momoko Mano

The purpose of this paper is to demonstrate how long-term experiences (more than 5 years) of BBS (Big Brothers and Sisters) activities affect BBS members' recognition of their helping effects. For this purpose, a longitudinal questionnaire study of the members with experience of "tomodachi katsudo", most conspicuous activity of BBS, was carried out by the author.

In analyzing the data, stages of their experiences are divided into three: beginning (within 1 or 2 years since becoming members), middle (after 3 years or being assigned to tomodachi katsudo), and present (or after sitting on a board).

Then, selected question items relevant to the helping effects out of 15 of each stage were calculated and Cochran's Q test was applied to the results of each stage. Then for the items showing differential trends ($P < 0.1$), McNemar test was applied to the difference in selection rates between beginning and middle stages, beginning and present stages, and middle and present stages.

In conclusion, it was discovered that the members tend to recognize different level of effects at the middle stage in most items and their recognition of the effects of the items relevant to juvenile delinquency are broadened through gaining experiences.

Keywords : **volunteers for supporting youth, BBS (Big Brothers and Sisters) movement, tomodachi katsudo, helping effects for helpers**